神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

荒地から耕地へ : Vita Sackville-WestのThe Land(1926)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2015-03-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 吉川, 朗子, YOSHIKAWA, Saeko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1980

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

荒地から耕地へ
—Vita Sackville-West の *The Land* (1926)

吉川　朗子

はじめに

ヴィタ・サックヴィル=ウェスト（Vita Sackville-West, 1892-1962）の名前が今日語られるのは、主にアーツ・アンド・クラフツのスタイルで作られたシシングハースト・ガーデンの作り手という文脈、そしてヴァージニア・ウルフとのレズビアン的な関係という文脈（『オーランド』のモデルであるという点）においてであろうか。彼女が文筆家として活動した時期もその交友関係も、その型破りなライフ・スタイルも、彼女がモダニズム期の知識人であることを告げているが、彼女の書くものはモダニストたちの作風とは程遠い。「文学伝統に対する彼女の敬愛の念は、モダニストたちと並べると時代遅れに見えたし、彼女の作品はやがて救いようのないほど古臭く見えてしまった」と Rebecca Nagel は評している（409）。ウルフは「モダンじゃないことなんてどうでもいいことよ」と言って彼女を慰めたらしいが、サックヴィル=ウェストはショックだったらしい（Nagel 409）。しかし彼女は文壇の流行に乗ってモダニズム風の作品を書くのではなく、あくまでも自分のスタイルを貫いた。そして彼女の作品は庭と同じく多くの人々に愛された。ウルフも称賛したという『大地』（*The Land*, 1926）[1] はホーソーンデン賞（Hawthornden Prize）を受賞して多くの読者を得、22 もの版を重ね、1971 年までに 10 万部も売れたという（Pomeroy 269, 281）。

『大地』は「冬」から始まる 4 つの章から成り、季節ごとに行う農作業・庭仕事を描くことを枠組みとしており、ウェルギリウスの『農耕詩』やヘシオドスの『労働と日々』をお手本とする農耕詩の伝統を汲むものである。[2] ウェルギリウスは『農耕詩』第 3 歌で、戦争に走り国を荒廃させる人々と、黙って大地を耕すことで祖国を支える農民とを対比させている。サックヴィル=ウェストの『大地』の場合、冒頭で戦争には触れないと言っているように、確かに戦争

---

[1] *The Land* は「大地」「耕作地」「土地」「国土」などといった重層的な意味を持つタイトルであるが、一番広い意味をとって「大地」という訳語を当てる。

[2] 農耕詩の流れを汲んだ英詩の系譜としては、John Philips の *Cyder*（1708）, Alexander Pope の *Windsor Forest*（1713）, John Dyer の *The Fleece*（1757）, William Cowper の *The Task*（1784）などがある。四季の変化を扱っているものとしては、Edmund Spenser の *The Shepheardes Calender*（1579）, James Thomson の *The Seasons*, John Clare の *The Shepherds Calendar*（1827）などがある。

への直接的言及はない。しかし時代背景を考えれば、この作品も、大地を耕すことこそが国を支える、あるいは大地を耕すことで、第一次世界大戦で荒廃した国土を復興させ傷ついた人々の心を癒すことができる、という思いを伝えていると読むことは可能であろう。

『大地』はT.S.エリオットの『荒地』（*The Waste Land*, 1922）への応答という側面も持つとされるが（Pomeroy 281）、後者が戦後の荒廃を描くなら、前者はその先の復興を願う詩、再生の可能性を歌う詩であるとも言える。実際、『大地』には『荒地』への間接的な批判あるいは応答とも読める箇所が散見される。たとえば、『大地』には荒れた土地、けちで反抗的、意地悪で一筋縄にいかない大地の様子が繰り返し描かれる。

> Wherever waste eludes man's vigilance,
> There spring the weeds and darnels; where he treads
> Through woods a tangle nets and trips his steps;　（'Winter' 124–26 ）
>
> （大意―荒地は人の警戒の目をかいくぐって、雑草や毒麦を生やす。森を歩いていくと、生い茂る草が絡まり足を引っ掛ける）

という箇所などは、『荒地』の第1章にある「つかみかかるこの根は何？　砂利まじりの土から／伸びているこれはなんの若枝？（What are the roots that clutch, what branches grow / Out of this stony rubbish?）」[3]といった描写を思い起こさせる。しかし『大地』では、「人間の手だけが実りと耕作地をもぎ取る。／人間と大地、なんと不思議な恋人同士だろう！（His hands alone force fruitfulness and tilth; / Strange lovers, man and earth!）」（'Winter' 127–28）とあるように、人は大地に愛情を注ぎつつも、これと戦う。そして自然の回復力（nature's renewal）と人間の忍耐強さ（man's fortitude）を称えるのだ（'Spring'）。

さて、上述のように、『大地』には四季のめぐりに合わせて行うべき農作業の様子が指南書のように描かれているが、その一方でこの作品には、美しく夢見るような自然描写や暗示的な挿話、物思いに満ちた詩行が見られる他、歴史的記述、神話への言及、詩形も声色も異なる独立したソングなどが差し挟まれる。季節の流れという大枠はあるものの、話の流れには明示的・論理的なつながりは乏しく、ウルフとの交流を通して影響を受けたであろう「意識の流れ」、あるいはエリオットやパウンドなどが用いたコラージュ的手法などが見られ、

---

[3] *The Waste Land* からの引用にはT.S. Eliot, *Collected Poems 1909–1962*（1963）を用いる。また日本語訳には岩崎宗治訳『荒地』（2010）を参照する。

この作品もまたモダニズムの影響を受けていることが分かる。全体として、ケント州の風景を基盤とするイギリス田園風景が喚起されつつも、両大戦の間という時代の持つ不穏・不安な空気も感じられる。本稿では、エリオットの『荒地』の反転としてサックヴィル=ウェストの『大地』を再読しつつ、両作品は同じ時代の風景のネガとポジであることを示したい。

１．「冬」

エリオットの『荒地』が春、「最も残酷な」4 月から始まるのに対し、サックヴィル=ウェストの『大地』は冬から始まる。[4]エリオットが「冬はぼくたちを暖かくまもり、大地を忘却の雪で覆い（Winter kept us warm, covering / Earth in forgetful snow）」と描いた冬は、「冬の繊細な銅版画（winter's finer etching）」として提示され、月夜を待つ様子が幻想的に描かれる。

> Waiting for night, and for the moon
> Riding the sky and turning snow to beauty,
> Pale in herself as winter's very genius,
> Casting the shadows delicate of trees,
> Moon-shadows on the moon-lit snow, the ghost
> Of shadows, veering with the moving moon,
> Faint as the markings on the silver coin
> Risen in heaven, — shades of barren ranges,
> Craters, and lunar Apennines, and plains
> Old as the earth, and cold as space, and empty….（'Winter' 336–45）
>
> （大意―夜を待つ。空を渡る月が雪を美しく照らし出すのを待つ。自身がまさに冬の精のように青白い月は、木々の作る繊細な影を投げかける。月に照らされた雪に落ちる影。月の動きに合わせて動く亡霊のような影は、空に昇った銀貨の模様のようにぼんやりしている―不毛な山並み、クレーター、月のアペナイン山脈、大地と同じくらい古く、宇宙のように冷たく空っぽな平原）

月明かりに照らされた白い雪の上に落ちる繊細な木々の影は、ぼんやりとしたまだら模様を作り、月の表面の模様を思わせる。すると今度は、その月から見

---

[4] ただし、冒頭の序歌で作品の主題を提示するという農耕詩に倣い、冬の描写の前に、'I sing the cycle of my country's year, / I sing the tillage, and the reaping sing, / Classic monotony … / I sing once more / The mild continuous epic of the soil…'という序がある。

た地球の姿が美しい惑星として想像される。エリオットにとっては忘却の雪（forgetful snow）で十分だったが、サックヴィル=ウェストにとっては、地上の争い、悲しみ、怒りを忘れるためには、雪だけでなく月の距離が必要だったようである。人々が寝静まる真夜中の雪原、唯一動くのは野兎たち—とそこへ一人の旅人が現れる。この旅人の登場で風景に一瞬動きが生じるが、彼は倒木の幹に崩れるようにして座り込む。その周りで兎が遊ぶ。

Merging himself in night till silence gains him,
And hares play fearless round him in the shadows
Cast by the moon. Whence comes he? What have been
His annals?　（‘Winter’ 371–74）

（大意—男は夜に身を委ね、やがて沈黙に捉えられる。野兎は恐れも知らずその回りで遊ぶ。月が落とす影のなかで。彼はどこから来たのか。どんな人生を送ってきたのか。）

この旅人はどこから来たのか、長い道のりを、足を引きずりながら、どんな敵意の眼から逃れ、何を諦め、どんな倦怠と絶望の夜（lassitude and despair）を潜り抜けて、雪に閉ざされたケント州へ、この美しくも冷たい死を宿す夜の闇（this night of beauty and cold death）へとやってきたのか、と語り手は問いかける。こうした描写からは、戦争で体にも心にも傷を負った復員兵の姿も窺える。倒れた木の幹に座り込んだままうとうとする男の上に、雪が舞い落ちる。

He drowses on his bole, while snow-flakes gather,
While snow-flakes drift and gather,
Touching his darkness with their white, until
He grows to an idol in the wood forgotten,
Image of what men were, to silence frozen,
Image of contemplation and enigma,
So stiffens in his death.　（‘Winter’ 381–87）

（大意—木の幹に座ったままうたた寝する男の上に雪は舞い落ちる。風に流されて集まる雪は、その白さで男の闇に触れていく。やがて男は忘れられた森の偶像、太古からの人の姿、凍てついた沈黙、瞑想と謎を表す像となる。そうして死へと硬まっていく。）

冬の夜の静かな美と同化していき、雪のなかに埋もれていき、ただ瞑想と謎の

イメージへと抽象化されていく様は、ウォレス・スティーヴンズの「雪だるま」（‘The Snowman’）の境地を思わせる。

One must have a mind of winter
To regard the frost and the boughs
Of the pine-trees crusted with snow;

And have been cold a long time
……
… the listener, who listens in the snow,
And, nothing himself, beholds
Nothing that is not there and the nothing that is.
（‘The Snow Man’, 1–4, 13–15）

（大意―霜や雪で覆われた松の木の枝を見るためには、冬の心を持たなければならない。長い間寒さに身をさらす必要がある。…雪のなかで[大地の音に]耳を澄ますものは自らを無と化し、そこに無いものは何も見ず、そこにある無を見つめるのだ。）

冬の心を持ち、寒さのなか大地の音に耳を澄まし、自らを無にして、存在する無を見つめ―そうした境地に達したこの男は、『大地』では本当に死んでしまう。そして男のまわりでは野兎が遊びを続ける―

But still the hares
Play hopscotch with the shadows, having less fear
Of death’s quiescence than of life’s quick danger,
In a world where men are truant, night to dawn,
Suspended hours when life’s poor common business
Lies dormant in a world to silence given,
Given to silence and the slanting moon.　（‘Winter’ 388–94）

（大意―相変らず野兎は影と共に石蹴りをして遊ぶ。死の静止状態は生の急激な危険と比べ怖くないので。夜更けから明け方までの、怠惰な、時が止まったようなその世界では、日々のつまらぬありふれた仕事も停止している。傾く月と沈黙に委ねられたその世界で。）

男は死んだというより、雪景色と一体化したかのようである。生から死への移

行は感知できないほどの変化しかもたらさず、野兎たちは石蹴り遊びを続けている。死は生に比べて危険でないからだ。生も死も等しく自然のサイクルの一部であるということを印象付ける一節である。「去年、きみが植えたあの死体、／あれ、芽が出たかい？　今年は花が咲きそうかい？」―『荒地』ではぎょっとするこの 2 行も、『大地』の文脈であれば、そう恐ろしいことではないかもしれない。

この、観察なのか瞑想なのか、幻想なのか判然としないスケッチのあとには、生きた羊飼い、ヨーマンの冬の仕事について書かれるが、「冬」の結びもまた、瞑想的である。社交的な都会人について、次のように評されている。

> But they have lost, in losing solitude,
> Something, —an inward grace, the seeing eyes,
> The power of being alone;
> The power of being alone with earth and skies,
> Of going about a task with quietude,
> Aware at once of earth's surrounding mood
> And of an insect crawling on a stone.　（'Winter' 588–94）
>
> （大意―しかし彼らは、孤独を失うことで何かを失ったのだ―内なる優雅さ、ものを見る目、一人でいることの力を。ただ一人大地と空の間に佇む力を。自らを取り巻く大地の雰囲気と石の上を這う虫の存在に気づきながら静かに仕事に取り組む力を。）

人は孤独を失うことで、内なる優雅さ、ものを見る目を失う、として、ここでは孤独の重要性が説かれている。エリオットらモダニストたちの作品にも、都会に暮らす人々の孤独と疎外感が描かれている。都会人の孤独は、一人でいる時間がない故のものであろう。群衆にもまれ、空と大地と自分だけになる時間を持たないために、静かに仕事に向かう力、大地の雰囲気や石の上を這う昆虫の気配に気づく力を失っているのだろう。エリオットは都会で孤独と疎外に苦しむ人をただ描くだけで、解決策は示さないが、サックヴィル=ウェストは一つのヒントを与えている。すなわち、孤独の苦しみから逃れるために孤独を求めることを勧めるのである。

２.「春」

サックヴィル=ウェストの『大地』は「四月は最も残酷な季節」などとうそぶいて冬を懐かしんだりしない。

… to outwit the cunning of the land
That will not yield, and will not yield again
Her due of food and wealth
Unless the moment's twisted to its use,
Wrung to the utmost by a vigilant hand,
Admitting no unseasonable excuse.　（'Spring' 60–65）

（大意―なかなか産み出そうとしない大地の狡猾さを出し抜くことが肝要だ。大地は、一瞬たりとも無駄にせずに使用し、用心深い手で最大限まで活用しない限り、支払うべき食物と富を二度とは産み出そうとしないからだ。天候不順などという言い訳は決して許されない）

とあるように、農業は意地悪な大地との戦いである。先にも述べたが、『大地』では大地がいかに強情で意地悪（Inhospitable, malevolent, unkind, spiteful）であるかが繰り返し語られる。荒地を荒地のままにしておくのは、人間の怠慢なのである。

「農夫の一年に始まりはない／ただ巻物に描かれた繰り返しのパターンが／繰り広げられるばかりだ（There's no beginning to the farmer's year, / Only recurrent patterns on a scroll / Unwinding）」（'Spring' 41–43）とあるように、農作業は循環的時間のなかでの同じ作業の繰り返しであるが、それは暦どおりではなく天候に左右される。種まきに始まり、この章では輪作、ホップの栽培、果樹園での害虫対策、家畜の誕生、養蜂、庭仕事など様々な農作業について、ときに迷信なども取り混ぜつつ語られるが、ここでもまた脱線が生じている。春の章と言いながら、12 月、3 月、4 月、5 月、11 月、6 月、2 月と、様々な季節に思いを馳せている。農作業には始まりがないとあるように、すべての季節は繋がりあい、関わりあう。種をまくときには花の咲くときを思い、木を植えるときには 10 年後、20 年後の姿を思い浮かべる―農作業というのは、目下の仕事に精を出しつつも常にその先の季節に思いを馳せる。そうした物思いの姿勢が、この章の脱線を許している。[5]

「春」の章で興味深い脱線のひとつに、詩形の異なる 'The Island' という詩の挿入がある。これは花の庭を島にたとえて描くものだが、そのイメージは不思議と軍備を固めたブリテン島を髣髴とさせる。花々は彼女の命に従って順に花を咲かせる。

---

[5] 『大地』はしばしば、イギリスの古きよき田園生活をノスタルジックに描いていると言われるが、実際の農作業は、過去ではなく未来を見こした作業である。農村風景を見てノスタルジーを感じるのは怠惰な都会人の戯言であろう。

Her regiments at her command parade,
Foot-soldier primrose in his rank comes trooping,
Then wind-flowers in a scarlet loose brigade,
Fritillary with dusky orchis grouping.
They are the Cossacks, dim in ambuscade,
Scarfed in their purple like a foreign stranger,
Piratical, and apt for stealthy raid,
Wherever's mystery or doubtful danger.
Iris salutes her with his broad green blade,
And marches by with proud imperial pennant,
And tulips in a flying cavalcade
Follow valerian for their lieutenant.　('Spring' 445–56, italics original)

（大意―彼女の連隊は彼女の命に従って行進する。歩兵の桜草は自分の列を守ってぞろぞろ進み、赤い軍服のフウロソウはゆるやかな連隊を組む。バイモはくすんだ色のランと同じ班だ。彼らは暗がりで待ち伏せするコサックで、異国人のように紫の飾り帯を纏い、不可解なことや危険が疑われる際には海賊のように忍び寄って急襲するのに向いている。アイリスは幅広の緑の剣で敬礼し、誇り高き帝国の旗を掲げて行進する。チューリップは早駆けの騎馬隊として、中尉のカノコソウに付き従う。）

サクラソウは歩兵で、フウロソウは連隊を組み、バイモやランは待ち伏せするコサックで急襲に向いている、アイリスは緑の剣を振るい、騎馬兵のチューリップはカノコグサを中尉として付き従うなど、花壇は戦争のイメージで語られる。第一次世界大戦が終わって十年近くが経っているが、次の戦争に向けて着々と準備が進んでいる様子が暗示されている。

その後、語り手の思いは農耕地や庭を離れ、野原、森、道端の花へと関心を移していく。ここまでは現在形でイギリス固有の花を描写するという態度が取られていたが、バイモ（fritillaries）についての一節からふいに過去形が使われ、個人的な思い出話が展開する。この花はサックヴィル=ウェストにとって何か特別な思い出を喚起する花なのだろうか。他方で、この花を巡る逸話には現実味が薄く、夢の中の出来事あるいは寓話のような響きもある。語り手が灯芯草、柳、桜、タネツケバナの咲くイギリス的な田園風景のなかを歩いていると、バイカモの咲く場所へやってくる。それはくすんだ紫色で、ハリエニシダの明るい黄色の花が咲き乱れるなか、何か異質な存在に見える。

And then I came to a field where the springing grass
Was dulled by the hanging cups of fritillaries,
Sullen and foreign-looking, the snaky flower,
Scarfed in dull purple, like Egyptian girls
Camping among the furze, staining the waste
With foreign colour, sulky-dark and quaint,
Dangerous too, as a girl might sidle up,
An Egyptian girl, with an ancient snaring spell,
……
And I shrank from the English field of fritillaries
Before it should be too late, before I forgot
The cherry white in the woods, and the curdled clouds,
And the lapwings crying free above the plough.
（'Spring' 539–56, my underlines）

（大意―それから私は芽吹いた草の合間にバイモの釣鐘状の花が暗がりを作る処へやってきた。陰気で異国風の雰囲気をもつ、油断ならないその花は、くすんだ紫色のスカーフを纏い、ハリエニシダの咲くところで野営し、荒地を異国の色に染めるジプシーの娘たちのようだ。陰鬱で暗く、風変わりで危険―まるで古くから蠱惑的な魅力をもつジプシーの娘がにじり寄るかのように。…　私はバイモが群がる英国の野原から逃げ出した。手遅れにならないうちに。森に咲く白い桜の花、雲の塊、耕作地の上で自由に鳴くタゲリを忘れないうちに。）

バイモの暗い花の色は、語り手にジプシーの娘を思い出させる。語り手は怖くなって逃げ出したと言うが、これは実話なのだろうか。[6] 'foreign' という言葉の繰り返し―これは、直前の挿入詩 'The Island' にも使われていた―が目につく。古くから続く由緒あるイングランドの家柄に生まれた自分の身体に混じるスペイン系の血を暗示しているのかもしれない。あるいは、戦争により国土が外国人に占領される恐れ・不安を暗示しているのかもしれない。そのバイカモ

[6] サックヴィル家は 9 世紀のノルマンディー公国まで遡れる由緒ある家柄で、16 世紀以降はケント州の Knole House という名のマナーハウスに拠点を置く、いわばイングランドの歴史そのものを体現するような貴族だった。しかしヴィタの母方の祖父はスペイン人の踊り子と恋に落ち、正式な結婚はしないまま子供を持つ。祖父の死後、屋敷と伯爵の称号は父親（祖父から見れば娘婿であり、甥でもある）が受け継ぐが、その死後は、娘のヴィタでなく父の弟へと相続権が移ってしまう。ヴィタが女だったため相続権がなかったということのようだが、スペイン系の血が混じっていたことも関わるのかもしれない。

の群生を見た年は、5 月が過ぎてもまだ冬空で、春が来るのがとりわけ遅かったこと、そしてある日突然春が来るとその変化がいかに急激であったか、いかに嵐が吹き荒れたかが語られる。これもまた実話なのかもしれないが、なにかを暗示している―戦争という嵐、混乱、不穏な空気を暗に伝えているようにも聞こえる。その後また現在形に戻るが、春とはどんな季節なのかを抽象的な言葉遣いで語っており、描写というよりは瞑想に傾いている。

３.「夏」

エリオットの『荒地』では、夏はリゾート地での休暇のイメージを思い起こさせていたが、サックヴィル=ウェストの『大地』における夏は最も忙しい季節として提示される。この章では、羊の毛刈り、羊飼いの仕事、干草作り、穀物の収穫などの仕事が描かれるが、かなりプラクティカルな指示がなされている。たとえば、オーツは熟しきって実が落ちてしまう前に刈り入れるのに対し、大麦は実が入って頭を垂れるまで待て、といった具合だ。

… at midday, walk
When sun is hot and high, and if you hear
Straw crackle in the standing crop,
And see the slender forest of the stalk
Still green towards the ground, but gold at top,
Then you may know that cutting-time is near.　（‘Summer’ 204–209）

（大意―正午、日差しが高く暑い時に歩いてみるといい。穀物畑の合間で麦わらがパチパチいうような音が聞こえ、立ち並ぶほっそりとした茎を見て、地面に近いところはまだ緑色だが、穂先は金色になっているのを確認したら、刈り入れ時は近いと分かるだろう。）

目だけでなく耳も澄ませて刈り入れ時を判断せよと言っている。

いよいよ刈り入れ作業が始まると、今度は、夕方になって刈り入れの済んでいない面積がどんどん小さくなってきたら、少年たちに来させよ、と言う。畑に隠れていた兎たちを追い立てて捕まえさせるためだ。兎たちが猛ダッシュで森の方へ逃げていこうとする様、それを追い立てる村人たちの様子が、生き生きと描かれている。

この活気あふれる収穫シーンの後には、神秘的な月夜の場面を描いた詩が挿入される。

When moonlight reigns, the meanest brick and stone
Take on a beauty not their own,
……
—Then earth's great architecture swells
Among her mountains and her fells
Under the moon to amplitude
Massive and primitive and rude;

—Then do the clouds like silver flags
Stream out above the tattered crags,
And black and silver all the coast
Marshals its hunched and rocky host,
And headlands striding sombrely
Buttress the land against the sea,
The darkening land, the brightening wave, —
When moonlight slants through Merlin's cave.

（'Summer' 498–500, 506–17, italics original）

（大意―月明かりに照らされると、どんなに小さな煉瓦も石も、自らのものではない美を纏う。… そして偉大なる土の構造物は山や丘原の間で隆起し、月明かりの下、がっしりした原始的で粗野な豊かさを持つに至る。―そして雲は荒れ果てた岩山の上で銀色の旗のようにたなびき、海岸はすべて、でこぼこで岩だらけの軍勢を黒と銀色に整列させる。陰鬱に海へ向かって足を延ばした岬は、控え壁のように、陸地を海に対して支える。暗がりに沈む陸地、明るく輝く波―月明かりはマーリンの洞窟に斜めに差し込む）

冬の雪景色においては、大地が雪と月明りで白く輝き、海は黒々していたが、ここでは、海が明るく輝き、逆に大地（land）は暗さを増す。再び軍隊のイメージが使われていることにも注意すべきであろう。この詩における land とはイギリスの国土のことでもある。ここでもやはり時代の不穏な空気が示唆されている。

しかしそうした体制側の動きとは無関係に、職人たちは日々の暮らしを真剣に生きている。「夏」の最後は、職人の仕事への言及で締めくくられる。漆喰塗、籠職人、何でも屋、レンガ職人、占い棒で水脈を探る人、大工などの仕事ぶりが並べられた後、次の一節では詩人の仕事が職人のそれに譬えられている。

The poet like the artisan
Works lonely with his tools; picks up each one,
Blunt mallet knowing, and the quick thin blade,
And plane that travels when the hewing's done;
Rejects, and chooses; scores a fresh faint line;
Sharpens, intent upon his chiselling;
Bends lower to examine his design,
If it be truly made,
And brings perfection to so slight a thing.（'Summer' 728–36）
（大意―詩人は職人のように孤独に道具と向かいあう。無愛想で物知り顔の木槌、薄くて切れ味のよい刃、切る作業が済んだら出番となるカンナ―ひとつずつ道具を取り上げ、拒絶し、選び取り、新たにうすく線を引き、彫刻作業のために鑿を研ぎ、ちゃんとできているか、設計図を調べるために低くかがみ、取るに足らないものに完璧をもたらせる。）

詩人を天才肌の芸術家、あるいは無から有を作り出す創造者のような存在として高みに置くのではなく、手に入る材料を組み合わせ、熟練の技でこつこつと物を作っていく職人と同列に置いている。職人は自分の材料について隅々まで知っているわけではないが、最後にはそれをコントロール下に置くとしている。詩人の力と限界を見極めている。逆に職人の仕事の価値を詩人や芸術家のそれと同列にまで持ち上げているとも言え、アーツ・アンド・クラフツ運動の影響が感じられるところでもある。

４.「秋」

「秋」の章は晩鐘が静かに響き、ゆったりとした時の流れる瞑想的な黄昏の風景描写から始まる。しかしすぐに、「自然は決して休戦を呼びかけない敵である。／見掛けの小康状態を信じてはいけない」（'Autumn' 43–44）と言い、収穫の終わった畑で刈り株を掘り起こし、怠惰な大地に新しい命を産ませるために、不休で働くよう命じている。そして冬に備えてするべき作業―耕すこと、脱穀、生垣の修理、木を伐る作業、果樹園での収穫、林檎酒搾り、ホップを摘む作業、ワイン造りなどが描かれる。まずは脱穀作業―朝霧の漂うなか農夫たちが現れる。

On fine October mornings when the mist
Melts to reveal between the steaming stacks

The thresher lumbering slowly up the lane. （‘Autumn’ 103–105）
（大意―晴れた 10 月の朝、霧が消えていくと、湯気の立ち昇る麦わらの山の間に、小路をゆっくりやってくる脱穀者の姿が見えてくる。）

これは『荒地』の第 1 章「死者の埋葬」に出てくる、冬の朝薄汚れた霧のなかロンドン橋の上を流れていく、死者のような群集たちのイメージの反転とも言えるだろう。霧が少しずつ晴れていくにつれて、麦束の山をほどく人、袋詰めをする人、積み重ねる人、乳絞りの娘、農夫の妻、雌鶏、犬、ねずみ、子供たちが出てきてにぎやかに作業する様子が浮かび上がってくる。都会の朝、うつむいて仕事場へ行く人々の群れとは大違いである。

「夏」では、英国らしい夏の農村風景を描くことが意識されていたが、「秋」ではケント州ならではの秋の農作業が選ばれて描かれる―さまざまな種類の林檎の甘い香りが漂い、豊かな実りでたわむ葡萄蔓は花綱のようであり、朝露の降りた野原では野茨が濡れてつやめき、キノコが顔を覗かせ、草地には白い霜がきらめく。つづいて林檎酒搾りの様子が香り豊かに描かれ、ホップを発酵させるためのオーストと呼ばれる乾燥炉での作業が描かれる。ロンドン子が眠るとき、あるいは秋の夜長をゲームに興じる時にも、ケント州の田舎では熱い炉の中での作業が続く、とあるが、これもまた『荒地』に描かれる都会人たちへの当てこすりだろうか。『荒地』第 2 章「チェス遊び」では、実った葡萄蔓の飾り模様のある鏡台や数々の煌びやかな宝石、人工的な香水の不思議な香り（strange synthetic perfume）が五感を悩ます様子が描かれ、またピロメラが森のなかで鳥に変身していく様子を描いた絵に言及されていた。それに対し『大地』では、本物の森で鳴くナイチンゲールの声が聞こえ、葡萄は実際にたわわに実り、秋はこの葡萄や林檎、ホップなどの自然の香りに満ちている。

さて、ケント州ではワインも作られるが、ワインの仕込み作業を描くことで、詩人の連想は遠くイタリアのマニトヴァ、ヴァージルのことへと移り、人間が太古の昔から行ってきたこと―大地を耕すことと書くこと―の尊さが語られて結びとなる。

Then all my deep acquaintance with that land,
Crying for words, welled up; as Man who knows
That Nature, tender enemy, harsh friend,
Takes from him soon the little that she gave,
Yet for his span will labour to defend
His courage, that his soul be not a slave,

Whether on waxen tablet or on loam,
Whether with stylus or with share and heft
The record of his passage he engrave,
And still, in toil, takes heart to love the rose.　（‘Autumn’ 531–40）
（大意―その土地についての深い知識が言葉を求めて溢れ出した。自然という親切な敵、無慈悲な友は人間に与えた僅かばかりのものをすぐに取り上げるということを知っている人間は、それでも、一生の間、自らの勇気を防御し、書字板に向かおうが大地に向かおうが、魂が奴隷にならないようにし、握っているのが鉄筆であろうが鋤の柄であろうが、自分の辿ってきた道を刻む。そして働きつつも、常にバラの花を愛することに心を砕くのだ。）

この作品全体を通してたびたび言及されてきたこと、自然には「親切な敵」「無慈悲な友」とでも呼ぶべき相矛盾した性質があることが、最後にまた強調されている。『荒地』の最後では、猟夫王が釣りをしながら自らの背後に広がる不毛な平原を意識し、自分の土地だけでも秩序立てようか、と思案しながらも考えるだけで留まっている。しかし『大地』に出てくる農夫たちは、自分の生きてきた道を刻むべく大地を耕す。韻文（verse）の語源が耕すこと（versus=turn of plough, furrow）であるように、ここでも詩を作ることと大地を耕すことがアナロジカルに語られている。「夏」においては、詩人の仕事は職人の仕事に擬えられていた。農夫も職人も、不利な条件と格闘しながら、日々同じ仕事を忍耐強く繰り返すことで収穫物・作品を生み出している。サックヴィル=ウェストにとっては、詩作もまたしっかりと地に足をつけ、日々の暮らしのなかから身体的感覚を通して感得した事柄を、こつこつと文字に刻んでいく作業であり、労働と結びついたものであったと考えられる。そして「労働しつつもバラの花を愛する心を忘れない」とあるように、暮らしの糧を得るための労働のなかに美的感性が共存することを理想としている。このあたりもまた、アーツ・アンド・クラフツ運動の理念と通じるだろう。

結び

1922 年にエリオットの『荒地』が発表された時、その斬新な詩風を文壇は歓迎した。そうした新しい作風に対し、サックヴィル=ウェストの『大地』はなんとも古風で辛気臭い。しかし前者が現代文明社会に生きる人々の精神の不毛を見つめるならば、後者はその再生の可能性を探っているとは言えないだろうか。それを楽観的すぎると簡単に切り捨ててもいいものか。モダニズム文学は都会

の文学と言われるが、同じ時代に田舎では人々はどう暮らしていたのか、『大地』はそれを示している。サックヴィル=ウェストは、「長靴が泥で重くなり」、「大地にしっかりと掴まれ、大地をとても近く感じる（held fast by earth, being to earth so near）」 といった経験をしたことのない、「本からの知識しかない都会人（The bookish townsmen）」（'Winter'）を軽蔑する。これは、引用と引喩を駆使し、泥ではなく重層的な意味で重たくなったエリオットの作風を暗に揶揄しているとも取れるだろう。そういうサックヴィル=ウェスト自身、この作品を書く以前には大地を耕したことなどなかったが、1930 年、彼女はケント州にあるシシングハーストの荒廃した古い屋敷（これは彼女の祖先が 16 世紀に所有していたものだった）を購入し、その庭の再生に取り組む。専門家の手を借りるのではなく、自ら耕しており、まさに「労働しつつもバラの花を愛する心を忘れない」生き方を実践したと言える。『大地』は彼女が実際に大地を耕し、庭を再生する仕事を始める前の準備段階、詩の形でリハーサルを行ったものとも言える。そして逆に、彼女の庭は、『大地』で示した願いが単なる絵空事ではないことを実践的に示したものとも言えるだろう。

参考文献

DeSalvo, Louise A. 'Lighting the Cave: The Relationship between Vita Sackville-West and Virginia Woolf'. *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 8.2（Winter 1982）: 195–214.

Eliot, T.S. *The Collected Poems: 1909–1962*. London: Faber, 1963.
（邦訳：T.S.エリオット作、岩崎宗治訳『荒地』東京、岩波書店、2010 年）

Nagel, Rebecca. 'The Classical Tradition in Vita Sackville-West's *Solitude*'. *International Journal of the Classical Tradition* 15.3（September 2008）: 407–27.

Pomeroy, Elizabeth W. 'Within Living Memory: Vita Sackville-West's Poems of Land and Garden'. *Twentieth-Century Literature* 28.3（Autumn 1982）: 269–89.

Sackville-West, Vita. *The Land*. 1926.

ウェルギリウス作、河津千代訳『牧歌・農耕詩』東京、未来社、1994 年。